

『台湾日日新報』所載章炳麟論文について

阿 川 修 三

私は一昨年、容谷氏の「章大炎旅台事迹考略」(『復旦学報』社会科学版、一九八〇年第五期)を読み、章炳麟が戊戌政変で台湾に逃れた時勤めた新聞が、従来信じられていた『台北日報』ではなく、『台湾日日新報』であることを知った。そこで、私は章炳麟が当然『台湾日日新報』に多くの論文を書いたはずであると考へ、その所在を求めたところ、東京大学法学部明治新聞雑誌文庫に所蔵されていることが判った。早速、同紙の章炳麟が台湾に滞在した期間(明治三一年一月から同三二年六月)の分を調べて、後の目録に示されている四一篇の論文を発見した。また、後に、目録の付録に示されている、章炳麟の詩と他人の詩文への批評を若干見つけた。その内、目録の注の如く、「祭維新六賢文」、「視大論」、「答学究」、「客常論」、「寄梁啓超」は、少し時間を置いて『清議報』に発表されたが、その他は今くの新資料である。これらの論文は執筆時期からも、また内容からも重要であると思われるので、まずその中から特に重要なものを選んで覆印することにした。以下、この新資料の意義について簡単に述べ、解題としたい。

まず、日本の章炳麟研究の流れを簡単に触れておきたい。日本の

章炳麟研究は大きく三つの流れに分けることができる。第一に、島田虔次氏に代表される、中国伝統学術史の枠の中でのみ章炳麟をとらえ、『民報』期の革命思想を軽視する流れ、第二に、近藤邦康氏に代表される、章炳麟を中国近代史、近代思想史という土俵の中に置き、「古い構造を通してなしくずしの改良をはかる」康・梁等変法派の上からの近代化に反対し、「古い構造の最底辺にある人民の立場から古い構造と一緒に近代化も否定」した思想家としてとらえる流れ、第三に、山田慶児氏に代表される、民族主義革命思想家ではあるが、西欧近代を超える視点を持つ思想家としてとらえる流れである。このうち、第一、第二の流れが大きな影響力を持ち、互いに対立しているが、章炳麟の思想を理解するためには、章が、「思想」としての西欧とはじめて対決しなければならなかった中国近代という場で思考し、論文を発表したという点から、当然、第二の流れのように中国近代史、近代思想史という土俵の上で考えねばならない。その場合、章炳麟の思想形成を時を遡って見ていくことが必要となるはずである。このように考えると、章炳麟の思想は『民報』期に最も整うが、そこに到るまでの思想形成を見ていかねば章

炳麟の思想を理解したことはならない。

しかし、これまで、この時期の資料はごく限られており、『廬書』(旧版)という論文集があることはあったけれど、執筆時期を確定できるものが少なく時を逐って思想形成を見るための資料としては適当とはいえない。そのため、先人(近藤邦康、高田淳両氏)のこの時期の研究には資料的制約があったのである。

ところが、この新資料は一八九八年一月から一八九九年四月までの戊戌政変直後に書かれ、また執筆時期が確定できるものである。つまり、最近出版された湯志鈞氏編の『章太炎政論選集』(中華書局、一九七七年)、『章太炎年譜長編』と相俟って、この時期の資料の空白を埋めるものといえる。また、この資料は台湾という当時清朝の権力が直接及ばない所で書かれたため、章炳麟の他の論文、たとえば『廬書』(旧版)と比べて、彼の主張がかなり直接的にでている。(もちろん、日本への配慮がなかった訳ではない。)

また、内容の面から見ると、この資料には先人が指摘したこととは異なることが述べられている。たとえば、高田淳氏は「戊戌庚子前後の章炳麟の思想」で、章炳麟は戊戌政変を境として、曲折はあったにせよ、康・梁らの影響から脱したと指摘しているが、「康氏復書」(一八九九年一月三日)・「答梁卓如書」(一八九九年二月五日)には、政変後も章炳麟が康・梁らに厚い情誼を持っていた事が窺え、更に、「論亞東三十年中之形勢」(一八九九年一月二九日)には、康・梁らがそうだった様に、政変後も光緒帝の復辟を期待していたことが窺えるのである。以上の様に、これまでの説とは異なり、章炳麟は政変後それほど簡単には康・梁らから離れず、密接な関係に

あったことが、新資料によって明らかになる。これまで、高田淳氏によって、戊戌(一八九八年)から庚子(一九〇〇年)までの、革命から革命に到る章炳麟の思想形成の過程がかなり解明されたが、この資料は已に見てきたように、氏の考えたよりも、実際の章の思想形成の過程が一層屈曲した複雑なものであることを示している。新資料は、章炳麟の革命から革命に到る思想を解明するために、更には、章炳麟の思想全体を解明するために、不可欠な資料といえる。

最後に、本資料を覆印するに当り、東京女子大の伊藤虎丸先生、横浜市立大の伊東昭雄先生、東大社研の近藤邦康先生、守屋図書館の酒巻氏、明治新聞雑誌文庫の方々をはじめ多くの方々の一方ならぬ御世話になったことを付け加え、感謝の意を表したい。なお、句読点等の誤りがあれば、全て筆者の浅学の至すところであり、諸賢の御指教を賜りたい。

なお、今回覆印するに当っては、東大明治新聞雑誌文庫のマイクロフィルム並びに目黒区立守屋図書館所蔵の原本を参照した。本紙には印刷不鮮明箇所が若干あったが、しいて埋めず空欄とした。また、今回私が気づいた「台湾日日新報」所載の章の作品については、後に「台湾日日新報所載章炳麟論文目録」及び「詩及び詩文評目録」として掲げた。紙面の都合でその全てを覆印することが出来なかったため、一篇篇を選んで句読点を付けて載せた。

注(1) 馮自由『革命逸史』第一集(商務印書館、一九三九年)の「章太炎伝略」の「章避禍至台湾、日人慕其文学、詩人山根虎雄特介紹之

於台北日報、被聘充該記者」により通説となっていた。

注(2) 『台湾日日新報』と『清議報』には全く異同がなし。

注(3) この分類は河田佛一氏の「書評 高田淳著『章炳麟・章士釗・魯迅—辛亥の死と生と』」(『史学雑誌』第八四卷第七号、一九七五年七月)に拠ったが、それぞれの流れの要約は主に筆者がまとめたものである。

注(4) 「章炳麟について—中国伝統学術と革命」『中国革命の先駆者たち』(筑摩書房、一九六五年)

『民報』期の思想を軽視する点には同意できないが、章の学問上の立場は、章学誠の「六経皆史」説の立場から一歩進んで「聖人の経のバイブル性」を否定したほとんど「単なる事実主義」であり、

「考証学の連続でありながら、実はもはや単なる清朝考証学、文献学の域をはるかに越えている」との指摘は重要である。

注(5) 「章炳麟における革命思想の形成」東京大学東洋文化研究所紀要第二八冊、一九六三年。

この論文は、西順成氏の「無からの形成—へわれわれ中国人民の成立について」『中国思想論集』(筑摩書房、一九六四年)の問題意識を受け継いでいる。

注(6) 『中国革命』(筑摩書房、一九七〇年)の解説

注(7) 近藤邦康氏、前掲論文 高田淳氏、「戊戌庚子前後の章炳麟の思想」『章炳麟・章士釗・魯迅—辛亥の死と生と』(電溪書舎、一九七四年)

「臺灣日日新報」所載章炳麟論文田録

年 月 日	題	名	面数	筆 名	備 考
1898年12月11日 (光緒24年) 16日	祭維新六賢文 *清廷偵德通臣論	麟 士 釗	3	炳 閔	『清議報』第7冊(1899年3月2日)
18日	臺灣設書藏談 *論清旗田	漢 閔 士	5	章 炳 閔	
25日	諄勸垂綸 *書清慈禧太后事	漢 閔 士	6	炳 閔	
28日	伊譚錄 *正疆論	漢 閔 士	4	炳 閔	
1899年1月1日 (光緒25年) 8日	平壤論 視天論	漢 閔 士	11	炳 閔	
			5	炳 閔	『清議報』第25冊(1899年8月26日)

11日	刻包氏『齊民四術』第二十五卷序	3	〃	
13日	*康氏復書	3	支那	
22日	答學究	4	〃	
24日	*人定論	5	〃	
29日	*論亞東三十年中之形勢	〃	〃	
	*黨研誤鑿	3	〃	
2月3日	論學校不宜專語言文字	3	〃	
5日	*答梁卓如書	5	〃	
7日	*絕頌	3	〃	
10日	*書「原君」篇後	3	〃	
16日	*臺灣祀鄭廷平議	3	〃	
19日	摘『楞嚴經』不合物理學兩條	5	〃	
21日	〃	3	〃	
3月5日	*非島屬美利害論	5	〃	
8日	論醫師不宜休息	3	〃	
12日	客帝論	3	〃	
19日	*三門割屬意國論	5	〃	
4月2日	*究移植論	3	章炳麟	
5日	*失機論	3	〃	
6日	東方格致	3	章炳麟	
8日	〃	3	〃	
9日	〃	5	〃	
11日	〃	3	〃	
12日	〃	3	〃	
13日	〃	3	〃	
14日	〃	3	〃	

『清議報』第14冊 (1899年5月10日)

『清議報』第15冊 (1899年5月20日)

清廷偵獲逋臣論

菊漢閣主稿

昨讀新報有云。清廷西太后。密諭駐紮東京公使。令謀縛康有爲。若不能。亦必設法殺之。噫異哉。吾不意聖神文武自此于補天之神媾者。而竟爲此穿窬草竊之行也。夫有爲之功罪。天下異議。而凡毗于后黨者。則固欲得而甘心。此無足論者。獨以公法論之。彼既遁于日本矣。將鑿罪致討而執之乎。抑將誘而執之乎。其鑿罪致討而執之也。則出國門一步。而有司之治。已不能假借我。公使雖智勇絕人。其能抗違公法。以闖入鄰國所治之域哉。以其誘而執之也。必給之陷入使館。而後公使得施其全權。剖之割之炮之炙之。可以惟吾所欲爲。雖然。往者龍照媛之于孫文嘗有是舉矣。而卒爲英人所迫脅。索之生還。夫孫文以醫藥小技。鼓動黔粵之民。一旦果能揭竿而起。其有益于中國與否。尙未可知。而英人已護之如是。今有爲柄用。百日之政。粲然見于記載。中外賢哲。莫不喁々想望風采。其與夫孫文者。豈直與薪秋豪之比哉。苟可贖也。人百其身爲日人者。將竟聽其陷入于窶獲而弗之救耶。是又不可得之數也。二者皆不可得。而爲法殺之々計。以清室之文母。爲異國之荆軻。事果可成。受盜賊之名。何害。吾特恐紀綱整飭之國。徼巡警柝。皆不若中國之疏。狙擊未成。而身先受盜賊之戮。辭所連染。則且以長信詹事爲渠魁。其爲鄰國觀笑。豈有旣哉。且有爲之抵芝罘。太后已奪政也。其獲救于重慶商船。雖未入吳淞口。而已在鰲角嘴以內也。不能執之于國。而欲執之于鄰。不能刺之于口岸之內。而欲刺之于重瀛之外。是猶待虎兕之出柙。而方責虞人以具弓矢張買羅也。豈不遠哉。雖然。吾聞某星使者。蓋嘗入保國會。而後以倒戈得志者也。其少時尤狙詐無行。天性未革。當思得

康有爲以爲功。懼其所遺壯士。燦燦七首。已駢布于三神山之下矣。有爲者。其亦慎所進止。以保萬民倚賴之身哉。 一八九八（明治三十二）年十二月十六日 第三面 漢文報

論清旗田

滿州入關以來。以近京五百里地圍給八旗。而田之者皆漢人。秋冬輸租以莊頭主其事。而此數十萬不土不農不工不商之游民乃安坐而食之。生齒日繁。啗食不給。于是有質之漢人者。乾隆四十四年戶部贖八旗入官老圍地二萬七千餘頃。令直隸州縣徵租解部。于年終普賞一月錢糧。此其所以待滿蒙者至厚。然而玉危無當終不可滿。食之者疾。爲之者舒。乃使爲餓殍而後止。古者或頭會箕歛以飽枝官。乃英主黷武。則亦橫征于下。未有虛郡國倉廩以養舊京百族之民者。夫一夫不耕。或受其飢。一婦不織。或受其寒。于是業劇財匱。而屯田之議起。當乾隆初御史范成言宜建興京爲都會。擇可墾種之地。遣旗人前駐牧。其餘如永州寧古塔黑龍江幅員不下四五千里。其閒或設牧廠。或廢爲閒田。甚可惜也。宜使旗人屯種。便直隸總督孫嘉淦以爲獨石口北行三十里卽爲平原廣野。又五十里爲紅城。于又百餘里爲開平城。其閒可耕之田不下數萬頃。張家口外北行七十餘里爲興和城。西行百餘里爲新平城。其閒可耕之田亦不下數萬頃。宜擇近城平方寬衍者畫爲公田。餘爲民田。每墾民田二頃者必令墾公田一頃。民田以爲世業。公田分給旗人。議者以爲不便格不行。惟撥往拉林屯墾。嘉慶十一年議以八旗閒散屯吉林。會秋收不豐事中止。至十九年始設中左右三屯于吉林之雙城堡。袤七十里廣百三十里地以响計大响十畝。而得糧四五石。肥者自倍一石之粟準倉石二有半分三屯爲百二十屯。凡地九萬數

千响人三十响三十戶而一屯。然多吉林奉天土著，而自京師發往者寡。時吉林將軍富俊欲屯伯都訥圍場，以爲可得地二萬餘响。道光初吉林將軍松筠又請開養什牧及大凌河馬廠。議亦格不行。至今七十年畿甸之地孳乳日多，生計日促，仰給南漕，猶如故也。嗟乎。自長城以內十九布政司民數至四百兆。深耕疾耨，老弱尚有凍餒者，又取其餘以養贍滿蒙，欲民主之不贖左藏之不罄，何可得也。且所以養贍之者爲其可以成勁旅也。髮捻以來南征北討無八旗一卒。其效與綠營等。今綠營將改爲練軍，而八旗之素餐如故。嗚呼。其優卹過于豐沛父老矣。廼者索倫東海諸部，蠶食于俄羅斯。爲八旗子弟者宜以屯田兼兵事、

爲漢人紓生計，爲國家效死力。及今營之猶以七年之病求三年之艾。而枋政者或護惜之。故曰，乾鵠之愛其子也，哺之稻粱，不使高飛以爲回翔槽巢之閒。雖有智者不能與我爭也。鵠至攫而食之。又焉得故巢一寸也。 荷漢閣主稿 一八九八（明治三十一）年十二月十八日 第六面 漢文報

書清慈禧太后事劄漢閣主稿

革政之獄世或以斬斷果賊，膠貽于慈禧太后，謂其始仁恕而終陰鷲。豈晚節之墮耶。嗚呼。爲是說者其可謂以蠡測地以錐視文。終身陷其埃噫之中，而不悟矣。夫女戎召禍，殘害不辜自古以然。而慈禧太后之惡直醜正尤其天然也。始聽政，則有肅順之獄。將反政，則有朝鮮大院君之獄。復出訓政，則有康有爲譚嗣同之獄。一人之身而齒牙爲猶以殄戮志節之臣者至于三數，而猶謂其晚節之墮，是猶以黏牡哺肝，歎惜于盜跖，而怪陽虎以不當竊寶玉大弓也，豈不遠哉。初肅順者宗家子也。性抗厲，好任事以郎中起家。文宗才之，稍益擢用，數

年驟至大學士，每士每視事，輒輒其同列，同列爭欲俛首者以上方嚮用無以撼也。洪秀全據江甯淮漢以南所在假擾。曾國藩以在籍侍郎統練勇戰，或出其境，所至克捷湘軍始重。大臣祁雋藻等陰詆之。賴肅順爲保全。左宗棠初在湖南幕府，威數摧寇權藉甚。湖廣總督王文韶其功，密騰謗書，以聞上命廉得實迹，卽就地以軍法斬之。湘潭人王闓運者故館肅順所爲求救。肅順亦憤厲不平。立屬鴻臚卿潘祖蔭草奏爲雪謗而已。自樞府左右之，乃復下詔賞宗棠胡林翼薦宗棠可大用遂以舉人賞加四品卿銜。其後定浙粵平隴右功烈無比，皆肅順力也。嗚呼。粵寇之救人以歸功于沅湘諸將，而勿知發縱指示者有人焉。此其于支那誠功罪參半，而在清室，則固與贊侯子房比。及創夷既定，諸大帥錫茅上賜鐵券者蓋以十數。未有以高鳥之盡抱恨于藏弓者。而肅順則先以誣搆死矣。始慈禧太后得幸文宗生毅皇。文宗知其性黠猾卽千秋萬歲後必竊枋爲宗社禍。陰欲效漢武殺鉤弋夫人事，以訪于肅順。肅順避之，未泄也。奄人有漏其言者，爲求援宣宗。故妃遂不果。咸豐十一年上崩于熱河。太后先入都，肅順方護梓宮在途次。其舊怨刑部尚書趙光等陰嫉太后，使垂簾聽政，遽發命以謀篡誣。肅順卽道中檢治之，械送京師，斬菜市。蓋垂簾之事自元以來六百年不見于載籍矣。一朝返之而其禍敗如是。甚矣。女戎之爲害烈也。其後朝鮮大院君李是應者以不悅于閔后仇厲守高，因發餉譴其士卒，而閔氏行賄于中國諸要人。以達上聽。太后命提督吳長慶，就執是應，安置直隸。余以所聞，是應爲人其骨鯁持風節，大與肅順等。當朝鮮外戚柄用時，權勢熏灼，朝野側目，與金瑩璧，日趨門下者無算，政以賄成久矣。自是應始革其弊，則朝政爲一清比，閔氏入宮，而是應中道頹廢。目視韓社之屋其端必自宮掖始，秋歎伏臆，不忍見危敗，而與晉陽之甲

以討之。又未嘗戶其名以歸于己，其諸可謂唯尾而哢音者歟。同惡相濟情也。故閔氏之憎是應，則慈禧太后必助成之。然後知古之悍民以外家驕容爲戒者，其立言果非過濶而遠于事情也。三十年以來肅順誅是應囚，至今日，則譚嗣同等六人又以齟齬築祿，至同日伏尸市曹。康有爲雖脫，亦幾幾不得自免。豈女主任事，則其禍必至于耶。抑慈禧太后之志，則可謂始終不渝而非其墮于晚節也已。

(明治三十二年十二月二十五日 第六面 漢文報)

一八九八

正疆論 薊漢閣主

臺灣島之有生民也，孰開之乎。曰：開于顏思齋而已矣。其譯晉之合與否不可知，而其爲日本商人，則無疑也。見吳振臣閩遊偶記既而荷蘭翦革以圍其地，得數十丈，久遂以鹿皮三萬張質其全島中，更背約以敵攻日本。顏思齋死，郭懷一代之，謀恢復々死，何彬代之力不敵，而趨廈門，適延平鄭王自江南敗歸。彬導之，入鹿耳門，逐荷蘭所置揆一王，而建東都。始招漳泉之士，以戰以舉以學以守其疆場以禦其胡寇。然則臺灣之爲都會者開闢于日本，而建國于支那延平。故東甥爲明氏遺孀效死，而魯監國之敗亦遺黃太冲等乞師長崎。其後徐姚朱氏嘗從延平攻金陵，卒歸水戶，著陽九述略，陳逐胡之術甚備。方外逸民如應元隆琦者皆以東浙故官，蜚遁晦迹稱賓萌于瀛海。由是觀之，中東之好自明季以然。而臺灣一隅其當爲日本支那聯邦之地，而視滿州以枕戈之仇也章章明矣。日本與支那通蓋始隋唐。是時受業大學者皆萃處樂羣無相猜防。而唐玄宗且嘗以君子國譽之。至于韃靼流鬼，而北獯髮之虜，魚皮蔽前，犬鹿代耕，雖齟齬之輩皆知其貧鄙殘忍，憤不與爲齒列。由是觀之，支那與滿州爲異種，而與日本爲同種也又章章明

矣。逆豎李光地以程朱飾吻脣，而心無故國之哀。至于裂冠毀冕，外視禹域，而奉胡貉爲所天思，逞其狡謀，蕩覆鄭氏，以爐永磨之遺民，替齊州之正朔。是時貝子賴塔等猶裴回大義，莫爲戎首，許以不稱臣不入貢，不薙髮，不易衣冠。以與日本朝鮮並峙，而先地故齟齬之爪牙之士破鏡之獸姚啓聖施琅之屬復爲之規畫于外。中外一心播扇顏頰道銅山下八單擣牛心摧虎井，而承天遂以不守跡其行事。鄭氏之得臺灣也與日本同，而滿州之盜臺灣也與荷蘭同。夫鄭氏與日本其當明季既相驩如一國，則滿州之盜臺灣于鄭氏，不啻其盜臺灣于日本也。有制作之素王出，相度颯脫而平讞其國，訟于臺灣一島者，其于東方，則必隸之日本。其于支那，則必隸之鄭氏。鄭氏既亡矣，一姓不可以再興，而版籍莫之爲授受。其將擁是二千八百里之島二百五十萬之戶口以卑之枕戈之仇乎。然則非屬之始關之日本而誰屬也。嗚呼。李光地之飾邪說，文茲言以濼，亂天下，塗民耳目也甚矣。自下關之盟臺灣東屬，斯猶晉疆祀田與仲尼之返鄆誰龜陰于魯于義義未虧于名則至正也。而臺民之付屬于日本者惑于李氏，猶思滿州之德不置。夫隨俗雅化而曰吾支那之民固也。今滿州則果支那乎。歸于日本誠不若歸于支那，而歸于滿州，則無寧歸于日本。滿州之與我仇非特異種而已也。自一片石之戰聲言爲明討賊，而終則先路福王，而後路自成，揚州之屠江陰之屠嘉定之屠金華之屠舟山之屠，吾支那之民僇尸蔽野，流血揚沫，雖以闖獸之賊虜，而其殘酷不逮于是也。春秋之義復仇者至于九世。是故吾支那之與滿州不共戴天，不共履后土。然而愛新覺羅第十一之變法失志見囚。吾華民猶爲之憤痛者曰，春秋有臨天下之言焉，有臨一國之言焉。臨天下，則支那之壤固不與滿州共處。臨一國，則愛新覺羅第十一者固滿州之令主，且其志亦爲齊州，而未嘗有私于北虜。是則亦元

魏之孝文也。是故痛其幽禁，而爲之感概不平。從其通俗以光緒紀元，以愛新覺羅第十一稱其主。其例則舉寧人大沖之著書等。若夫爲薄海計，則滿州者固吾之世仇，而日本者猶吾之同種也。況臺故嘗隸屬審子版圖者哉。臺之士民不著黃書，不省十日記，不讀鮎埼亭集，不覽日本乞師記。以仇讎之滿州，而奉之爲故主。是猶赤子之劫略于盜跖，而爲之感獲臺隸，遂誤勿之爲主父，而忘其故家宗族也。余年十六七，則誦古文歷史，慕辛棄疾爲人。蓋已知滿州支那之所以分，而日本支那之所以合。是故雖樂文采，而未嘗一日應試于其校。今年已三十一矣。會遭黨錮，自竄臺北。其志則以訪延平鄭氏之遺迹。未嘗隸籍爲日本士，嘗非有私于瀛洲貞嶠之民也。然而以支那日本較，則吾親支那。以日本與滿州較，則吾寧親日本。全臺之民苟撫其衣冠，討其冊籍而思。夫故國之思怨，則其視滿州與日本必有辨也。其視延平鄭王與夫洪承疇李光地者亦必辨也。作正疆論。

年一月一日第十一面 漢文報

一八九九（明治三十二）

康氏復書

余于十一月上旬馳書長素工部。其稿爲同人持去業登報章。數句以來屏居枯坐戚々寡歡，念夙好之彫零，悲天綱之潰決，疚懷中夜不能奮飛。昨者晨起股憂填膈，忽得工部報書，眉宇肝腸，陽氣頓發。蓋不啻百金良藥也。書中稱譽不無過情，然工部非妄有阿借者。至其自述懷抱，卓詭切至，語不繖統，而令人肝脾，志士誦之，靡不按劍。故錄其原稿，登之報章，以備賢哲省覽焉。或曰：子與工部學問途徑故有不同往者。平議經術不異升元，今何相暱之深也。余曰：子不見夫水心悔菴之事乎。彼其陳說經義判若冰炭，及人以僞學朋黨攻侮菴時，

水心在朝乃痛言小人譖罔，以斥其謬。何者。論學雖殊，而行直諒術自合也。余于工部亦若是已矣。近世與工部爭學派者有未給諫一新。然給諫嘗以劾李蓮英罷官。使其今日猶在朝列，則移宮之役有不與工部同謀耶。余自願學術尙未若給諫之墨末，所與工部論辯者特左氏公羊門戶誦法之間耳。至于黜周王魯改制革命，則亦未嘗少異也。

余袖周案西漢書知

左氏大義與此數語吻合況旋乾轉坤以成既濟之業乎。若夫拘儒鄙生舖餒槽魄，其點者則且以迂言自蓋，而詩禮發家無所不至。如孔光胡廣者余何暇引爲同同學也哉。曩客鄂中時，番禺梁鼎芬吳仁俊秀水朱克柔皆在幕府，人謂其與余同術亦未甚分涇渭也。既數子者或談許鄭，或述關洛正經，與庶舉以自任，聆其言論洋洋滿耳。及叩其指歸卷凌逡，卒成鄉愿，則始欲割席矣。嗣數子以康氏異同就余評騭並其大義亦加詆毀余，則抗膺力爭，聲震廊□，舉室愕眙，謂余變故，而余故未嘗變也。及革政難起，而前此自任正學之數公者乃皆垂頭圍翼，喪其所守。非直不能建明高義，並其夙所誦習若云陽尊陰卑子當制母者亦若瞠焉。忘之。嗚呼。張茂先有言變音聲以順旨思摧翻，而爲庸今之自任正學而終于脂韋矣梯者。吾見其若是矣。由是觀之，學無所謂異同，徒有邪正枉直焉。持正如工部，余向暇與論誦法之異同乎。陰曆十二月朔支那革炳麟識

康氏復書

枚叔先生仁兄執事。曩在強學會辱承書，良深感仰，卽以大雅之才經術之懿，告卓如。頃者政變僕爲戮人，而足下乃拳拳持正議，又辱書教之。何其識之絕出尋常而親愛之深耶。臺灣癩鄉豈大君子久居之所。切望捧手得盡懷抱馳騁歐美，乃僕夙願特有待耳。兼容並包，教誨切至，此事至易明，僕豈不知而抱此區區。蓋別有措置也。神州陸沈，

堯臺幽囚，惟冀多得志士相與扶之，橫勝豪傑非足下誰與。惟聖激昂同志，救此淪胥。爲道自愛，書不盡言。十一月十五日有爲再拜。

一八九九（明治三十二年）一月十三日 第三面 漢文報

人定論

支那 章炳麟

乘焱風，而薄乎玄雲之上，視蒼々天者，其果能爲人世禍福乎。抑亡乎。曰：夫柳子厚者固以癡痔果蔬瘵之矣。余則曰：浮游乎空虛之中，百昌生物，以息相吹，竝難痔果蔬而亦未嘗有也。借曰：有之禩祥之說，則上古愚人所以自惑，而聖人因其誣妄以爲勸戒，亦猶蚩尤之作五刑，而聖人因之以爲鯨墨剔剔而已矣。夫愚人無識也。蓋較蚩尤爲尤甚，如京房劉更生諸公，推述五行，極陳災異，以效忠於人主。其所救正誠有足多者而害亦自此始，何者不數見之事以忤人爲災，則必以其合人爲瑞。是故天有甘露，地有河清，木有連理，草有紫芝，鳥有爰居，獸有角端。總是數者而得其一，則皆以爲合符于上帝。凡所以煩有司謁財賦與徵調盡民力者且不可勝數。由是觀之，始以爲勸戒而終以致敗亡。莊固有言邱夷，則淵實魯酒薄，而邯鄲困其諸相，因之理固有若是者歟。實驗之學不出，而上古愚人之惑五千世，而不解。是故前乎子厚者有王仲任，後乎子厚者有王介甫。其所立說蓋竝以天變爲不足畏，而迫于流俗，猶時々蒙其詛譏。自今之世有實驗也，而其惑始足以陶汰。然都會而外然疑未諳，衆不可以戶說井里之民。上古民也，隕星曰流血矣。木鳴曰城墟矣。鷲老稚子奔走相告國中治禱，而依巫祝以求解者猶上古之民也。往者多那底之釋其第一星見于戊午，清咸豐八年適粵寇屠吳越。至壬午，清光緒八年其第二星見，則法越之難起，逾年遂蔓延閩，伏尸積骸亦無慮數千人爭。相徵信託于王相以天道爲，果有知今臺中地震道路

傳言，又以爲震于冬者不崇朝而有兵禍。夫慧之附日也其周雖有遲速，其軌道雖有遠近，然三百行星之民大自海王，細至虹女簫女之屬，皆有時見之。其不能常爲兵禍，亦必不專爲禍于東亞也明矣。地震雖一隅，其端則由伏火大地之始若丸炭，而熾久之，乃爲熾火而泉壤蔽其上。然遺熱故在灼燭。崩裂甚，則爲火山，而少衰爲地震。彼溫泉者亦火山之屬也。人固樂溫泉而憎火山地震矣。使天果欲以火山地震示禍於人，則曷爲又以溫泉媚之。震之甚者崩崖折棟以壓覆居人是可憂耳。苟無是禍而憂其兆兵于異日，使異日復憂其異日。噫。言若是越哉。天地之間愛惡相搆而情僞相攻。苟爲人害，雖蠱蟲之微可畏也。苟不能爲人害，雖天地之大勿畏也。吾先師荀子有言，曰：日月之有食，風雨之不時，怪星之黨見，是無世而不有之，上明而政平，雖竝世起無傷，上闇而政險，雖無一至無益。嗚呼。聖矣。臺人方聳于地震之禍，趨々然若將兄裨竈而父柏常癩也。余故作人定論以釋之。

一八九九（明治三十二年）一月二十四日 第四面 漢文報

論亞東三十年中之形勢

支那 章炳麟

觀于旅順膠州之舉措，黃海以北其趨于俄德也明矣。雖有朝鮮如鳥鵲之夜集於林，徒免其寐而勿見其窟，此不足以扞禦瀛碼。支那自宮禁之變，賢才既屠，王化陵遲，宇內魚爛，將使蘇邱之上，滿人不亡而夏子之胄亡矣。然則朝鮮不足與圖事，而支那無可與再謀。日本東處亦孤憤而孑立也。若是則亞東之長終于銜璧，其壤地終于生荆棘殖黍苗乎。且夫表東海者終以和漢爲旗幟。浸假而攘竊符璽者入于秦秦、輸于織室、哲王復辟，鶯築進用，厥徵天民三百六十。夫東面而揖日本，以合從爲治，期以一世，其究極則將何以也。章子曰：黃海之必淪者勢

也。豈直黃海東自大河、西自岡底斯山、其陰則淪于俄者亦勢也。詔號之所布、威靈之所輝、雖有管蕭、盡于南服而已矣。今夫滿蒙人之志固可知矣。自綏芬河蹙俄之斥候日進、琿春甯古塔間種族錯處、受其陵轢、免胄伏地、而不忍抗也。幕北四汗青吉思裔也。當其蹙俄、俄人羽鏃不發、孟勞不舉、轉北遁逃、而不返其威熾矣。今遂爲俄人跽藉、呼以白皇、進以醴醕、免胄伏地、而不忍抗也。若是、則其歸心于俄人、而望之如句陳大星也韋矣。不然滿漢之同禍雖至愚劣、猶將與知之。

今慈禧太后之言、則曰、西方之公法有亡國無覆宗、吾守吾玩好、蓋吾金幣、寧局促于一綬而爲其役屬之帝。夫豈能以一人持秀言。固滿蒙之甘心于爲斯養走卒也久矣。今上者于滿洲、則由余金日碑也。衆心成城、而衆口鑠金、上之廢固職矣。幸而中與猶不足以挽滿蒙之北向自河而北亦掣曳于滿蒙也必也。今夫日本馬關之盟能得志于臺灣、而不能得志于遼東。何者如鴉長鞞矣。雖有篳篥、不可以及驂騑之腹、而及之者其脊也。俄之于南北暨、則臺灣腹而遼東脊也。日本割之、譬則臺灣脊而遼東腹也。且庫頁既失、而韓之巨文英無勁旅。巨文島曾割讓英國漢陽士大夫其真頑矜橋與滿蒙相長弟。今雖以帝號繼三統、而俄患暫弭、終亦附庸於俄。俄有韓、則勃濟斷而箕尾絕。禍且及日本北海、雖完亦僅足自衛、其不能以長鉞彈丸暢威于寒帶可知也。夫日本不北征、而支那且不能撫河朔。雖有令主以從親相約、亞東之威必不出南部矣。聞者奇材構異之土南方爲盛、懋遷之所至以通歐美、則利盡。南銀銅千冶、苦舜千陵、吉貝千壩、石墨千缸、繭素千種、日夜也。以是定治中東胥命、而固之、以英滇粵以外、雖與法爲甌脫、其勢則不得與俄比。若是、則招懷爲夾以和民居師也殆可矣。若夫肇域所錯、封所暨一世以內、日本雖盛令必不能外行於支菟、支那之都必不能出于武昌金陵。

其海軍之舳艫必不能、鷹遊門、而稅駕也且夫究極者勢也。知舊隄之必敗而辨其隄者不可以保其隄。知北方之必不能與俄爭而辨其北方者亦不可以守其南部。江左之劉裕之岳飛其所經及于關中河北而後可以處吳越。故曰、知其不可奈何而必不能安亡者亦命也。亞東之究極雖定于南、非得恢卓雄略之士以征撫朔漢者、其能爲南部雄伯乎哉。

一八九九(明治三十二)年一月二十日 第五面 漢文報

黨研誤鑿

頃觀東京朝日報、以支那改革派推劉坤一張之洞爲領袖、此說誤也。劉固湘軍宿將、處事持重、不驚聲華、與新進之士銳志變法者相左、而移宮獄起、清流被、乃反賴其維持。漢高以厚重少文許周勃、而謂安劉氏者必在斯人。坤一殆其亞矣。若張之洞、則外託維新、而其忘不過養交持寵。凡所經畫靡裕無數、卒無一成。此或才力不逮君子猶恕。乃自八月政變張反倒戈新黨、凡七發密電至京、誣諛長信無所不至、比之杜欽谷永、蓋猶有其罪而無其功焉。其勸學篇一種頗足以欺世盜名。要之、外篇所說時有可采、而內篇則皆模稜語。今乃謂其苦心籌畫不欲與滿人立異、則其所欺爾。果具此心但當頌德教民盡忠可矣。今于周秦諸子無不醜詆、并西漢今學學派亦皆憤如仇敵。是其發源之地、固以孔光謹慎胡公中庸爲正鵠。蓋新黨立論大近狂狷、容有未合中行者。而駁之者、則爲路粹之告孔融矣。之洞少時頗有文譽。談者或謂可繼紀文達公。所著輜軒語以誨學童亦中肯綮。然微言大義、則非其所聞且聞見雜博、而不曉師法、不知家數。于經學、則不能分別古今。于卜學、則但知校勘字句。于古文、則不知別裁僞體之當斥、而純正如滌生者反不列于桐城。于駢體、則混管宋隋唐于一邱、而軌轍

如衰校者亦比肩于洪御。于此尙分晰不清。何論微言大義哉。原其學術，高則爲翰苑清流，下則爲應試好手而已。乃既盜文學之稱，遂抗顏以經濟自詡，而所成卒至如是。噫。紀文達吾不得而見之矣。得見畢秋帆斯可矣。荷漢閣主 一八九九（明治三十二）年一月二十九日 第五面 漢文報

荅梁卓如書

卓如國士歲聿云，莫淪若酷酷手書兩緘一夕杳至。而陽氣發乎眉宇。今日又聞呂氏少帝沒計踐阼息。謂姚崇祕計當發此日。東人杖義多，在社會積精自剛要不能速。然遲之又久，則支那士民銳氣頓挫，並爲臣僕。共此關胥斯亦可長慮者開濬民智，以爲招攜懷遠之具。猶奔者之布遠勢終當收效。然吾身能見與否，則不敢知。君子立言固不爲一臆計來教。謂譯述政書爲第一義。如青田退著郁離他日因自試惠我禹域。幸甚，幸甚。鄙意哲學家言高語進步退化之義者，雖清眇淵疏如談堅白，然能使圓□□趾知吾身之所以貴。蓋亦未始不急也。老聃曰：草食之獸不疾易敗。水生之蟲不疾易。未此言生此地食此餌。故能成此形具此性也。然則獸若易斃蟲，若易水，則鯨之化鹿，雉之爲蜃有明徵矣。自脊骨之類始有鱗族，屢易其壤戶，更其食，而後得爲生資。今乃幸爲文明之族。故孟荀言性，一舉其始，而一道其終。舉鴻荒之民以比後世。其智愚馴野之和，夫何翅倍蓰，譬諸草木焉可憫也。使支那之民一旦替爲豪隸，浸尋被逼，遁逃入山，食異而血氣改，衣異而形儀殊，文字不行，聞見無徵，未有不化爲生蕃者。船山思閭錄之所爲懼也。嗟嗟。袁州桑土今爲野蘭。西人謂放家豚于草澤，則化爲豪豬蠶豕。盡然人獨何能自保耕穰之暇，占畢之士。方以爲幸避兵燹，則

子孫胤胄其形性可以長存。是以晏安鴆毒而□所懼必以種類蕃變之旨覺之，或冀其慘懷悼悚，發憤爲天下雄爾。靜言思之轉婆沙論謂，或金翅鳥，或龍，或人，皆具卵胎，濕化四生。而江總白猿傳謂，歐陽訖妻，爲猿所竊，因生率更見文獻通考經籍門皆不盡誣妄。然則異物化人未有底止。人之轉化亦無既極。孟荀之說亦迭爲終始三統之互建矣。謄予手足，而敷妓形之將然滋足感也。抑儒者之說多言無鬼神見大史公書是秦漢古義固然非自無鬼異于釋迦基督之言靈魂者。夫肢體一蹶五萬世而不昭，則孰肯致死。民氣之懦誠無足怪。然性無鬼神而胤嗣之念乃獨切於佗，國家之說至欲以枯骨所藏福利後裔，今知不致死以禦侮，則後世將返爲蠻獠猩猩。其足以倡勇敢也明矣。然則儒者之說固不霸道，及無色界天無閒地獄而後可作民氣也。南海在東想尙須羈留數月。秦風一章重□呈覽，祭六賢文，卽八月閒耗時作。當時欲與□□設奠黃浦，因作是篇以復。復生樞至上海，徧訪船步及湖南會館，皆莫知所在。自餘諸君並未知其何時歸葬。逾月遂至臺灣。斯學不果。蓋既其文未既其實也。亦重錄□上卽希警覽，近有新作。幸許惠示復筌遺著，弟惟寥天一闕文一冊其餘多未及見。友人中亦有篋藏者乎。羅綱滿天珍重是。幸炳麟頓首。十二月二十二日 一八九九（明治三十二）年二月五日 第五面 漢文報

絕頌

諛誤之美名謂之頌。古者之有頌，其汪威盛德足以高世。故受之而無所忤。且非其臣子，固莫爲言者。然大小雅至百篇而頌特三十一章，亦吝惜其詞矣。自尊主抑臣之論作，而諛誤取容之士以頌自效。然法家之真者固未嘗以頌爲贖。韓非曰：鐘鼎之銘皆華山之棋番吾之迹也。

雖李斯之頌秦皇帝、刻石于會稽諸山者，其言猶有分際。試取封禪典引以李斯之文，則其夸誣翔實爲有開矣。夫倡法家之說者莫過韓非。竊法家之說，而以文其尊主抑臣之義者莫過李斯。然絕之者至甚而用之者其歸美僅如是。然後知後世之爲頌，垂頭悲鳴以覲旦夕之虞祿者，特人主迫之使必出于是也。且夫有顏異反唇之誅，則憚之者不得不作封禪以求活。柳宗元之貞符，自以不牽圖讖，不舉瑞應，賢于漢人遠甚。然其爲考詞以求貨罪，則未有異于彼。夫人主不能迫其臣，以直言極諫，而迫之使垂頭悲鳴以覲旦夕之虞祿，則頌者乃適以自彰其過，而非以自彰其美也。至于今世，則雖有成康之德，而周頌亦不得作。又非直漢唐以來夸詞之當絕也。何者懷隨侯之珠結錄之璧，而以自銜者其取信必不逮于市人之稱譽。古者五洲未開，文教未被，與自冠帶之國而外不過蠻夷蠻夷之言，不足以爲法。故使蠻夷之誠不若使其臣子頌之之爲得也。今者四隣之國皆文明矣。伐有可旌，德有可錄，必無不著之豪華以頌其美者有隣人之頌，而臣子復自頌之。是不足于市人之稱譽，而復以其美自銜。斯則適以取疑，而非以取信也。由是言之，頌之當絕，豈不信哉。或曰，卮酒之祝上壽之詞情也。能絕之乎。夫祝者雖歌祈福之言耳。與頌之名相類，而其實固殊。祈福之言得曰祝，不得曰頌。表德之言得曰頌，不得曰祝。祝可無絕頌，則一切當付有司播之使無餘燼而後已。嗚呼。彼頌君之言，則已矣。今之飾小言美辭以干縣令而覲其旦夕之虞祿者又何其多也。 一八九九（明治三十二）年二月七日 第三面 漢文報

書原君篇後

支那 章炳麟

黃太沖發民貴之義，袖官天下之質，而曰，天子之于輔相，猶縣令之

于丞簿，非寬高等，如天之不可以階級升也。較近五洲諸大國或立民主，或崇憲政，則一人之尊日以駕損，而境內日治。太沖發之于二百年之前，而徵信于二百年之後。聖夫。抑予以爲議論之于政法，猶藥之于疾疾也。趣效而已。雜糅枯梗場圃以爲至賤，而中其疾，則以爲上藥。自古妄人之議常冒沒以施當時，卒其所言之中亦與太沖等者蓋未嘗絕也。予觀明武宗嘗自號總督軍務威武大將軍兵部宜救，雖御名不諱，傳之後世以爲談笑。又上求之，則漢靈帝嘗納許諒伍宥之說，謂太公六韜有天子將兵事因購武平樂觀躬撰甲介馬稱提督，或受郝國武臣官號，佩其章鉞，懸然勿以爲怪。而戎事日修，則天子誠與庶官等夷矣。嗟乎。彼漢明二主者寧逆計至是哉。事之票忽而得之者千世以後輒與之相契合。于是知妄人之議未可非，而得舉其事以釀嘲者適咫尺之見也。昔吾友夏曾佑嘗說易，曰，坤之上六龍戰于野，其血玄黃，則羅馬既亡與七國五季之世是已。乾之上九曰，亢龍有悔，則中國朝鮮之君是已。其用九曰，見羣龍無首，則華盛頓民主之政是已。夫龍戰至亂也，無首至盛也。而其聚散時或相似且化益之。書稱刊天爭帝而不克帝，乃戮之爲無首之獸，以舞干戚。是固以寓言見旨者。然其與羣龍亦相類也。無首而樂推，則曰，羣龍無首，而攘奪，則曰，刑天彼其操行致功相反戾如此。而其不膠于一君，竊々然以斗杓旋機視其上者抑何其矩範之合也。志曰，善人不善人之師，不善人善人之資。顧不信歟。夫妄人之所以荼生民覆宗稷者，其行迹乃多與官天下相似。豈特以天子爲軍吏也耶。 一八九九（明治三十二）年二月十日 第三面漢文報

臺灣祀鄭廷平議

支那 章炳麟

當明隆武永曆之際，王師畫燭，崎嶇嶺海，而同仇之士如蝟毛，而集其閒以王號詐者蓋十數。然或出于草竊亡命，既無遠略，或且挾乘與出走，劫奪從官，焚掠瘡藏，與寇盜無以異。求其忠節雖略之士得二人焉。于前日何中湘，于後日鄭延平。中湘降李錦郝永忠之卒，難以左良玉舊部，列十三鎮處洞庭南北，然未嘗取其梟健以爲爪牙，勢渙莫統內闕于牆，卒有湘潭之敗。節制之道蓋未盡也。延平規模闊遠，其士卒又素習傾側，擾攘閩海之閒，形勢局促，與中原相隔越。然猶溯洄大江，拔皖南數十縣，合圍金陵，扼其會咽。雖特勝而老南都不舉，其撻伐之，威亦輝矣。天假之年而糾合義旅，以圖進取以王之材，武臺灣。雖小亦足用也。惜乎。中道天喪，復失蒼水，替其輔來，嗣王睿世，僅蹙々守邊幅。然明氏支庶依以自全者幾二十年。衣履弗改，共和弗革，抑豈非王之遺烈歟。昔漢祚既易，或謂，吳玉宜稱上將軍九州伯，吳勿納卒建黃武之號，而孫盛。惜之以使權固秉臣節世稱漢將。豈不義。悲六合仁感百世也耶。延平當永曆之亡，猶奉其年號，握璽勿墜，未嘗以島國之主自與。嗚呼。其賢于吳也遠矣。臺灣南北故王所蓄，番壤剔于義宜耶。然自克塽之降改葬南安，表墓之典蓋弗可及矣。寢廟之設及閒見于臺南里社廟。杓農牧奔走不足以稱盛德。愚以政府宜爲建祠之主祐，無爲偶像，使有司主其祭，以章志節雄略之士，及因國之無主後者，謹議。 一八九九（明治三十二）年二月十六日 第三面 漢文報

非島屬美利害論

支那 章炳麟

世以非律賓羣島之屬美爲有害于亞東者。余嘗笑之。夫以西班牙之分崩潰決勢如魚爛，不可爲全鱗。縱非有古巴之變，而呂宋亦歸于他

人。曩合法人以其保暹羅亡越南之其力，蠶食斯土。然則連衡之俄其力可鑿于赤道。是來譁而膠我也。使其屬英，英于亞東誠久，要無負矣。全牛之體肥頰無朋，則角之所以抵觸者益厲吾。甯求其瘡而不欲益其肥。非謂其爲俄法之續也。獨雄于東南洋，則亞人亦爲其斷役而已矣。今夫美，則自以爲萬邦之司直也。非直美自言，五州各國亦以美爲萬邦之司直也。今顧背素義而以兵力播及于東半球。其地則益，其望則捐矣。雖然，美故以商立國，與亞東相親睦。雖有一疵，非耽耽然欲爲熊羆之攫人者橫于一嶋，而未欲爲禍于雪山以東也。三年以往有檀香山之役矣。嶋中之黃髮亂志各異向，一則欲西驚而趨日本。一則欲東驚而趨美利加。先發制人卒爲，雖有然，未嘗日本有一矢之事。由是言之，美雖得地，甯以佳兵爲志者哉。且既得地而守之，則士卒不可以不訓練，船械不可以不功堅，饋饟不可以不給足。其必增于曩之海軍三萬人也又可知矣。彼其改圖進未能爲害于亞東。而退乃可助亞東以爲禦侮。是何也。今之道合從者必言中東英美。而美無軍港於亞東，則急難未足以相救。今以非嶋爲屯墾之地，若握彈丸。有事，則舒掌而縱送之。吾見其有益于亞東，而未見其有害也。難者曰，美故非崇武。今雖增兵，亦足以守邊幅耳。不爲害，則已。其奚能爲益乎。曰，夫虎豹在山，則藜藿爲之不采矣。烈缺畫作，則千人爲之懼氣矣。故相援之國稍增其勢，則吾氣愈盛，而敵人愈有所憚。雖虛中如康瓠，猶足以爲益也。曩者阻割遼東時，獨俄之兵力足以及黃海耳。德法，則惘疑虛獨，而勢固不相及也。然俄人得德法以爲援，而遂足以自行其志。譬之火之燒積薪者，其炎上薄，則雲霓蟬蝻皆足以益其光矣。雲霓蟬蝻非能助火以播熱也。而人之攝于火者見之，而氣益靡。彼美之爲益于亞東，甯異是乎。夫相度大勢者不于咫尺土之得失，而以羣之勢

爲重輕。淺夫。□于是局促繩墨，顧無所親于域外。彼以美割非嶋爲有害者，其亦滯于咫尺之見歟。一八九九（明治三十二）年三月五日 第五面 漢文報

三門割屬意國論

支那 章炳麟

三門山者在浙江甯海縣海中。南拒林門，北連南田。南田亦曰大佛頭山。明魯王時，浙東義旅常依此爲固海。船北行必經三門，南田循石浦而後至鎮海。故三門者亦浙海南道之蔽也。意大利以歐洲二等之國聘幣往來。故無隙隙忽以兵艦迫割斯地。凡吾支那種族固無不張裂皆者，而韋子獨以瓦石視之。夫非如葡萄牙之割澳門。言者以爲海濱孤島拚之，不足爲重輕也。今中國所視以爲雄魁破鏡者，北有俄羅斯而南有法蘭西耳。俄之權不足以及江浙閩粵，而法實左右之，其相倚依也，若蠶。距法以四明會館之聲衛骨于明人，北有不得志于上海，則南將有甯波之警。苟得彈丸黑子之地于甯波，則其權匪直橫交粵，而將北浙于浙海，雷廷所擊無不摧折，萬鈞所壓無不摩碎。若是，則吳越之閒未得緩帶而處也。今夫意大利與法人則世仇也。自拿破侖第一當黎墾其壤屏屋其社後，雖恢復累卅而不得息。至撒丁王出而後全國一統，拿破侖第三敗而後羅馬俯首于政府。是其于法人也，則質首可矣。處歐洲中央之地，常懼俄人之出黑海，而與德奧合從以斷其航路。其盟已於今未替，則其于湖方之國又相甚如仇讎焉。夫北則側目于俄而南含怒于法。今于壹明之間乃將一三門山以爲藩地。是必能天遏法權，而使之不得北漸于甯波也明矣。是故英人贊之，而俄人出死力以阻之。俄之阻非助中國也，將以伸法人之權于浙海。英之贊自爲其利權，亦非助中國也。而中國未嘗不被其利。是故觀英俄之一阻一贊，

而吾之當割與否可知也。曰，使俄人而不阻，則猶可緩割爾。今俄人既出而阻其成矣。我聽其議，則彼內伸□蘆之權于浙海，而外反示德色于我。其所以求償者豈直三門山之比哉。故莫若陽從俄謀，而陰聽意人之□所請。既成，則俄人以不得伸權爲大恥，而意人亦有喜路怒頭之忿。若是，則英意之與俄法其憤嫉愈深，其扞禦愈力，而後江浙閩粵之海可濶。孰與乘得失于彈丸黑子，而使隣腕其弱者友逞志于他日乎。故曰，三門山者吾以瓦石視之也。一八九九（明治三十二）年三月十九日 第五面 漢文報

究移植論

章炳麟稿

桀亡于湯，而淳維入匈奴。秦亡于子楚，而弓月入日本。使黃種不幸被逼迫，則遁逃伏竄者何地之依。薛叔耘揣之曰，澳洲之城今華人居者戶口數十萬，他日移植必王于斯土。夫南洋羣島與中國傳近若肘腋。輪艦所抵或味爽，而發見星而達。任力役于是者以兆計。叔耘皆無取。顧獨有取于大險之澳洲者。何也。豈不曰，赤道之下其氣暘暑，其地輕脆，其人酷竄，處沃土，而與不材之民居者必不可以爲善國。惟澳洲，則見南極之出地，同爲溫帶。天氣發斂與北緯不異。故意移植者之必在于是也。章子曰，苟如是，則猶西班牙之分國于巴西。今西日瘠弱，而巴西乃與美利加等。大是其比類也。則猶大鵬之生於桃蟲也。雖然叔耘不取于二隅，而獨取于南服者，則以爲避俄而已矣。然則秘魯墨西哥諸國其在西半球，亦南部。而爲屏蔽其政令條教。蓋畔無可觀者。安知黃種移植之不在於彼也。今大地之言曰，白人必勝黃，若秘魯諸國者其法令未立，而巫蠱禁祝之未去，與紅人襍糅，而成其汚俗。非直絀于齋州，亦不逮阿富汗矣。雖然觀于草昧，則歐亞二洲近

不過六千年，而秘魯乃有五萬年之文物。然則賢劫之初啓于吾東半球，方爲蠟蛤海苔之世，而彼乃先進而爲文明也。且夫文明則必有復故之日矣。今其浸微浸昧而相聚以入幽谷者白人弗能化也。雷雲不雨，濁河不澄，變秘墨之風而反之泰清者。又安知其不在黃人之移植者也。難者曰：天下有遁逃伏竄，而能撫有他人之國者乎。曰：含血之倫必有精銳之氣。精銳之氣蟄伏于胸中，若水之有隱熱。非厲之磨之搗之，則不足以發。故自古常有亡國敗家，而其人材什倍于平世者。飛廉之遁逃伏竄于霍太山，而小戎之詩繼之，以作其子孫，遂足以覆六雄。帖木兒之遁逃伏竄于撒馬爾罕，而能北入俄羅斯，南屠印度，西滅土耳其。殷之遺孽元之遺孽其驍健足以有爲也。如此而況上哲哉。是故黃種之移植其或在澳洲與或在秘魯墨西哥未可知也。其遺種之必在于南部，則既可知也。天地之道日中而還，月盈而匿。田鼠之上騰，或爲飛鼠積灰，廢炭之在原野或足以生蠅蚋。盛衰文野之限固無有一成而不可變者。是故聖人盡其陽節，守其陰節，順民之所爲而降命于山川以殺大地。

一八九九（明治三十二）年四月二日 第五面 漢文報

失機論

章炳麟稿

嗚呼。以支那今日之制于滿洲益之，以盜臣擁五軍以自衛四鄰，勿能討草澤，勿能起爲督撫者其途無意乎。說者以爲今日之練軍疲茶酷竄，難以效用。非有寇盜，則必不肯發。乃觀于荊州械鬪之役，則漢人之忿駐防也實甚。使武昌有賢帥，因民勿忍挾兵，西上以問罪于駐防，焚其子城，誅其將軍，然後振凱江漢，改朔易服，以遂滿自任，是亦可謂良機矣。夫練軍雖不足以禦外寇，而以之屠執冰之駐防，則固綽然其有餘裕。惜乎。吾大夫張公者亦疲茶酷竄之徒也。吾嘗謂、

曾文公之克金陵也，豪俊之士襍沓雲合，龍驤虎步，高下在心。不以此時建號金陵，而俛首下心，以事辮髮之羈胡。其昧于大義，而爲中國遺無窮之患也亦甚矣。或謂：是時西有駱文忠，南有左文襄，各擁旌節皆非肯相附者。然文襄與官文留首之仇也。使曾公于佛爾圖春許奏之頃，激厲將士西出惜黃以討官文之罪，則文襄不待移檄，而自附爾駱公。雖賢固倚文襄爲左右手。文襄苟附駱公，將焉往失此良機，而甘以通侯宰相臣僕異類。嗚呼。曾靜一匹夫耳。猶志在蹈海，不欲爲滿洲民。庶如文正者其不愧于宗族之賢哉。蓋自康熙以來李光地張廷玉之徒以經史文學羈縻士人。士人之嘗其餌者惟以模稜兩可之學自溺，苟得利祿，亡廉喪恥，而無所顧。故其上者忠君之忿重，而愛國之情輕，其下者保籠之願深，而立名之志淺。使今日天下皆曾文正猶仆々倪々不足以復漢唐之舊宇。而況疲茶酷竄若張公者乎。斯古之論世者所以歎息于傳變皇甫嵩也。

第三面 漢文報

一八九九（明治三十二）年四月五日